

## 「南部の女」を想像すること

——「オーガスタ・ジェーン・エヴァンズ『マカーリア』と女の規範」

越智博美

## 序

オーガスタ・ジェーン・エヴァンズ（・ウィルソン）（一八三五—一九〇五）といえば、かなりドラマティックなセンチメンタル小説『セント・エルモ（*St. Elmo*）』（一八六七）がまず思い浮かぶ。作家になって第二作目の『ビューラ（*Beulah*）』（一八五九）のヒロイン、ビューラと『セント・エルモ』のヒロイン、エドナは、孤児で作家になる道を目指し成功を果たしつつも最後にその夢を喜んで明け渡すことで結婚というハッピーエンドをむかえる。ビューラは、一度は独立を手放したくないあまりに断った相手との結婚に際し、「きみは名声を得ることが氷のような影に過ぎないとわかったのかい？ あの野心を満足させても幸せにならないとわかったのかい？」（412）と尋ねられるとそのとおりでと答え、彼を見上げる。同じくエドナも夫となるセント・エルモから「もう本は書かないこと。勉強もしないし、あくせく働かない……」（365）という彼女の今後の生活像を「文学のくびきを断つ」こととして提示してみせる。

しかしながらその二作のあいだに位置し、南北戦争のただ中に発表されて人気を博した『マカーリア』犠牲の祭壇

『Macaria: or, Alms of Sacrifice』(一八六四)はこれらとは明瞭に異なる結構を持っている。前半は、明らかに従来どおりのセンチメンタルな「家庭小説」として幕をあげつつも、後半で唐突に戦争小説になるのである。また幕切れの章では、恋する男を失った二人の女がともに自立し、そして支え合いながら暮らそうとする。ドルー・ギルピン・ファウストは、この小説の復刻版の解説のなかで、この作品がセンチメンタルな家庭小説と戦争小説のそれぞれの「ジャンルの境目を踏み越えている」(xvi)とするが、しかしほぼ同じ文章を収録した『発明の母』では、この作品がもつばら戦争を媒介に女のジェンダー領域を踏み越えることに注目している。(171-178) また一九世紀の「女の小説」を論じたニーナ・ペイムは戦争小説という位置づけをすることはないものの、最後のシーンを戦争という機会によって与えられたものとしている点では同じである。(288-289)

戦争はたまたまその時期戦争であったから、題材になつてゐるのだろうか。エヴァンズが南部連合のナシヨナリズムに熱狂的に賛同し、参画してもいたから描きたかつたことだろうか。家庭小説なら前半だけのことたりる。そして独身の女二人が平和に暮らす最後の章は、そのジャンルがほぼ結婚で終わることを考えればジャンルの規範を逸脱している。一方、戦意高揚を目指すなら、当時の歌などによくあつたように愛するものを亡くすシーンをこそ愛国心の一番のクライマックスとして、二人の女が心を寄せていたラッセル青年の死で終わればよいだろう。残された二人がむしろ経済的に独立し、希望に満ちて終わるというエンディングは戦争へのセンチメンタルな参画という次元とはなじまないものだ。前半と後半がほとんど別の作品といつてもよいような亀裂を走らせるこの小説において、最終章は前半にとつても後半にとつても奇異なものに映るという意味ではジャンルをまたぐ、別の言い方をすればどちらにも収まりきらないという、ファウストの指摘は的確である。しかしながら、これらの研究者が言及しないのが、前半、後半、そして最後の章にまで頻々と引用されているエリザベス・バレット・ブラウニングの長編物語詩『オー

ロラ・リー (Aurora Leigh)』(一八五六)の存在である。愛する従兄からその詩を否定されながらも詩人として生きようとし、最終的には詩人として名をなしつつ、従兄との愛も成就させるオーロラの物語。『マカーリア』においてはテニスなどの詩も引用されるなかで、『オーロラ・リー』だけは突出して使われているのだ。亀裂が走る結構をつなぎあわせるかのように引用されるこの詩をこの作品の通奏低音であると考えれば、一見不備と見える結構もテーマと必須の関わりを持つことになる。また、『マカーリア』のヒロインたちの人生はオーロラの人生と重なる部分も多いが、しかし前者の場合には男女の愛の成就是、決してこの世では起こりえず、むしろ最後のシーンで寄り添うのは恋人同士ではなくヒロイン二人である。このエンディングの意味するところは何だろうか。本稿では、南北戦争とジェンダー規範に注目しながら、『オーロラ・リー』との重なりとずれを念頭において、エヴァンズがこの作品で行き着いた地平を考えてみたい。

## 1 よき娘たちの牢獄

物語は一九世紀の女の小説のフォーミュラに沿って始まり、対照的に描かれた娘が中心となっている。この対照的だが共通点も多分に持ち合わせ、幼なじみでもある二人の物語がそれぞれに展開していく。ジョージアのとある町W、そこが一番の名家の娘アイリーン・ハンティンドンは一四歳。「昔の巨匠が創りだした理想的な頭」の形に、輝く髪、完璧なかたちの顔の輪郭に「紫がかった青い目」、「混じりけのない象牙」のような「透き通った」肌(15)が印象的な少女である。彼女は父親を崇拜する娘ではあるが、同時に父親譲りの頑固さも持ち合わせている。その知性は「男のように」「鋭く、論理的」、「分析的」(88)だが、同時にどこまでも寛容でもある。また独立心がきわめて旺盛で

「宿り木みたいに誰かに頼る」(51) 自分は厭だと思っている。一方、同じ年のエレクトラ・グレイは叔母のオーブリー夫人とその息子のラッセルのところ引き取られた孤児で、貧しい生活をしている。その容姿はアイリーンとは正反対で、漆黒の髪にさぐるような黒い瞳、紅い唇にオリブ色の肌をしている。あたかもフェア・レディであるアイリーンと対をなすかのようなその性格は想像力が勝っていて「情熱的」であり、芸術家になって不朽の名作をもにしたいと願っているが(59)、「自分のことは自分が誰よりもよく決めることができる」(63)という強靱な独立心においてはアイリーンと共通している。二人は社会的な階層においても、またその性格と素質においても独立心以外は見わるところがないにもかかわらず友情を築いてはいるが、エレクトラの心情は複雑である。彼女は従兄弟のラッセルを愛しているが、ラッセルはアイリーンに心を寄せているからだ。

この二人は南部での少女時代に無理矢理別れを告げ、試練の道へと入っていく。そこからは二人それぞれにキリスト教徒としての美德の危機や意にそまない結婚の危機をくぐり抜けて成長する。昔の恨みでオーブリー夫人を憎むアイリーンの父は、オーブリー一家を援助したアイリーンに腹をたて、ニューヨークの寄宿学校に追いやってしまう。一方エレクトラは高名な画家に見いだされてニューヨークの彼の自宅に引き取られる。ニューヨークは南部とは対照的に、二人の少女の悪い面を引き出すばかりのところとして描かれている。アイリーンは自分が日々のあれこれかまけて人のためになる道を見失いかけ、エレクトラはその偏った読書によってほとんど異教徒のようになってしまった。こうした筋立ては一九世紀の家庭小説として格段奇抜なものではないだろうが、結婚と職業をめぐるエピソードには南部のジェンダー規範と、さらに言えばこうした小説ジャンルそれ自体から逸脱しかねない要素がつきまとっている。南北戦争前の南部の中流以上の白人女性をめぐる規範は、もちろん同時代に北部にもあった「本当の女性らしさ」という規範と重なっていた。信心深く、美德を備え、他の人々に身を捧げる家庭の天使であること―しかし、黒

人奴隷を抱えた社会にあっては女をめぐる規範は、夫や父を神ともあがめる考え方が典型的に示すように、家父長制の男性規範を支えるイデオロギーとしてプランター社会を支える基本的な制度であるという点で、北部に比べてより強固なものであった。(Jones 8-11) 男性と結婚することは精神的にも経済的にも自立を失うことだと考える女たちがいたとしても、だからこそ結婚後は逆に男性にがんばって出世をしてもらい、それを「媒介」に自分の地位だけは安定させることを目指すしかない女たちもいた。(Lee Ann White 19-20) 結果として大人の女を「結婚と母親になること」で規定する南部社会 (Moss 5) を舞台にした物語で職業を追求することは南部の女の限界をあぶり出すものとなる。

たとえば『ビユーラ』のヒロイン、ビユーラはガイ・ハートウエルから結婚を申し込まれても「依存」(115) するのが厭だからと断ることになるとはいえ、この時点ではハートウエルは傲慢で専政的な男と描かれているために、断ったとしてもこうした小説の枠組みを壊すことにはならない。実際、物語はその後エドナが自立を捨てて穏やかになったハートウエルと結婚するシーンで終わるのである。『セント・エルモ』においても、一度は断った放蕩者のセント・エルモとの結婚は、セント・エルモが改心して牧師になったのちにエドナが作家の仕事を捨てて結婚するというまったく同様のパターンを踏む。このような物語ジャンルにおいて恋愛の成就、すなわち結婚に向かうことが自立を捨てることを前提とするのだとすれば、あくまで作家の道を貫こうとするならそこに恋愛の成就はあり得ないということになる。結婚をめぐるこうした葛藤はエドナやビユーラが孤児とはいえない立派な中流階級の家庭に引き取られ、結婚相手もそのような階級であるために、ステイーヴン・M・ストウが南部のプランター階級における結婚の儀式的伝統を論じた内容と重なりあう。とりわけエヴァンズが『ビユーラ』を発表した一八五〇年代にはエチケツトブックや小説―エヴァンズより少々年上の世代のキャロライン・ヘンツの作品など―における求婚場面はあらかじめ定められ

た規範とあらたな現実がぶつかりあう場になりつつあり、またそこには愛情などの感情が重要視されるようになっていた。(Stowe 68-69) 『ビューラ』と『セント・エルモ』はそれぞれ南北戦争の前と後に出されたものだが、ビューラとエドナの相手の男性の結婚観は「あらかじめ定められた規範」の側に属している。彼女たちが「もう書きません」と言いつつ結婚するのは、みずからの孤独に耐え難くなったことや相手の男性が欠点を克服したからという理由づけはあるとしても、実のところ古くからの規範に従うことにはかならないし、そのような大団円こそが「女の小説」を支える文法でもある。

『マカリーア』における独立心の強いヒロイン二人が直面する求婚の場面にも規範と価値観の葛藤がある。画家修行中のエレクトラは師匠のクリフトンが自分に思いを寄せていることを知る。彼女は弟子として彼の家に住み込んでいる限りはクリフトンの画家仲間からかわいがられるが、ひとたび展覧会というパブリックな場に優秀な作品を出すと今度は師匠の手助けを疑われてしまい、女が芸術家として独り立ちする困難を味わっているところだった。「無名で貧困 (poverty and obscurity)」などところから出世したいとアメリカン・ドリームに憧れ、またエリザベス・シエロンやシビラ・メリアンといった女性画家の先達をロールモデルとし、また他の女性画家との絆 (sisterhood) も切望する彼女に、クリフトンは名声のむなしさを説く。(144-145) 彼はエレクトラが愛されてもいないのにラッセルに思いを寄せるのは「女らしくない」(138) と断じる。そこにあるのはこれまでずっと彼女の面倒を見て愛してきたからこそ自分の求愛は受容れられるべきだし、それこそ女らしいことであるという発想である。しかしエレクトラは愛なき結婚は無理だと突っぱねるばかりである。エレクトラが恩人の求愛をつっぱねてもなおろうじて家庭小説のヒロインの座に留まるとすれば、それはクリフトンが嫉妬深い男として描かれているという一点においてでしかない。このことはアイリーンが父の決めた結婚相手、従兄弟のヒューを拒絶する際も同じである。ヒューは基本的に「利己

的」(133)で知性もない。そしてエレクトラと同様、アイリーンはそこに愛がないし、愛のない結婚は「不自然」であるばかりか「神聖さもない」という理由でヒューを拒絶するのである。(194-195) 人格者で知性あふれる牧師ハーヴェイの求婚についても愛がないからということが理由で家庭小説では理想的といってもよいような男まで断つてしまふアイリーンがそれでもなお家庭小説のヒロインに繋ぎ止めるものがあるとするなら、それは心の底で焦がれているラッセルへの忠実さとラッセルを嫌う父に従わねばならぬという娘の忠実さだけである。実際彼女はラッセルからの愛の告白すら父親のことを思つて断り、心の中で涙を流すことになる。(292)

二人はまたそのような決意の根拠として「自分は自分に属する」(114)「生得の権利」(133)を持っていると考えている。アイリーンは父に向かって「わたしは自分の行為以外の何ものにも責任はありません……お父様にはわたしを導く権利がおありですが……わたしは自由な身として生まれたアメリカ人です……いつたいなぜこんな結婚を押しつけたいなどとお考えになるのでしょうか。お父様は女には自分の人生の幸せを語る権利はないとお思いなのではないか」(200)と言つて抵抗する。しかしながら二人の「生得の権利」は実現されることはない。しかも父やクリフトンという二人の男にとつてのジェンダー規範からすれば身勝手な娘たちは、一種の罰を受けてその身勝手さを物語のうえで相殺されることになる。クリフトンが病に倒れたことでエレクトラは罪滅ぼしをかねた看病の歳月を過ごすことになり、アイリーンは父の逆鱗に触れていっさい口を聞いてもらえない孤独な日々を過ごすのである。

女性画家の先達に憧れるエレクトラも、エレクトラ同様、科学の道を開いたマリア・クーニッツ(177)をはじめとする女性の先達への敬意を持つアイリーンも、そのまま自分たちの職業を実現することは、ジェンダー規範に照らしても、センチメンタルな家庭小説というジャンルの文法に照らしても、きわめて困難である。エレクトラの作品が優れているゆえに逆に師匠のものだとされて自分の作品とは見てもらえないというエピソードや、アイリーンが匿

名で論文を発表していることから明らかなように、彼女たちの職業人としての独立は公の場では認められることがないからである。そしてまたこのジャンルが要請するプロットにとどまる限り、アイリーンが学者として、あるいは孤児院経営者として独立することも、エレクトラが女の芸術家として独立することもままならない。父や保護者の男、あるいは女らしさ、娘の義務といった規範のみならず、家庭小説の文法そのものまでが規範としてプロット上のヒロインたちの独立を阻んでいるからだ。しかしここで「父親への忠義」などという名目や「愛」ではない、それどころか愛を保持したままで同時に自立への希求をも満たす別の次元の解決を提示するのが、南北戦争および南部というネイションである。

## 2 「南部」の共同体を想像すること

『マカーリア』の物語は最後の四分の一ほどで、まったく別の様相を帯びる。物語は作品中で南北戦争が始まるのに呼応して戦争物語へと移行し、ジェンダー規範とセンチメンタルな家庭小説の枠組みが縛っていた女たちを家庭の外へと連れ出していくのである。一八六〇年、サウス・カロライナの連邦離脱のあとを六州が追い、翌年にはアラバマ州モントゴメリーを首都として憲法会議が開かれて新しい憲法の草稿が作成される。四月に戦いの幕が切つて落とされる、リッチモンドに首都を移動した南部連合は瞬く間に国家 (state) としてのかたちを整え、あとは惨たらしい戦いへと突っ走っていった。

物語はその過程に寄り添っていく。しかも、その記述は南部連合への愛国の物語として当時の南部ナショナリズムの主流の意見に忠実である。政治家を目指すラッセルは南部の独立分離をめぐってアイリーンの父と対立するが、最

終的にはジョージアは分離の道を取る。「自由は北部から逃げ」(307) 南部こそ「自由の守護者」(299) であるとして「独立」(300) を目指すというのがその大義であった。南部は反逆者ではなくてむしろ第二の独立戦争を戦っているのである。実際、南部のエリートはアメリカの建国にたち戻って政治を浄化するのだというレトリックにより、南北戦争の南部の大義を二度目の独立戦争と位置づけていた (Rable: Faust "Confederate Nationalism" 14, 27-28)。このことは「南部」を表す名称にも表れている一般に日本語では南部連合と呼ばれているこの政体の正式名称は「アメリカ連合国 (Confederate States of America)」であり、自分たちこそが正しいアメリカであるという意識を表明していた。だからこそ一七七六年以降の南部セクシヨナリズムの流れなどはいっさいなかったことになって、直接に一七七六年と一八六一年をつなげるレトリックが幅を利かせることにもなった。(Thomas) 南部のシンボルにはしばしばジョージ・ワシントンが使われたほか、南部連合大統領ジェファソン・デイヴィスもリー將軍も、その文脈では第二のジョージ・ワシントンという位置づけを与えられた。さらにはみずからをピューリタンや移民ではなくてアングロサクソンの騎士の末裔であるとして (Rubin 15)、その起源に至るまで北部とみずからを切り離していくのである。このような独立戦争のレトリックは英国における評価を気にする風潮もあいまつて、彼らにとつての戦争が奴隸制の是非をめぐるものではなく、国家として持つ権利であるとする主張へと収斂していくこととなる。(Rubin 4)

ルービンはベネディクト・アンダーソンの議論を裏づけるかのように、南部連合の人々が以上のような発想を共有し、ネイションを想像／創造するのに新聞が大きな役割を果たしていたと指摘している。(12) 実際、新聞や雑誌は、戦前には北部からの情報に依存する部分が多々あったが、戦争が始まってからはむしろ北部とは切り離して南部の各新聞が情報提供をしあうという意味でも、南部の人々が共有する情報源となっていた。人々は新聞を読み、読めない者は人から聞かせてもらい、というように新聞の情報は南部連合の人々が日々待ち望み、共有する戦争体験をもたら

していたのである。(Rubin 12)

『マカーリア』最後の四分の一は、内容のみならずこの想像のプロセスに関わっているという意味においても南部連合のナシヨナリズムから生成され、またそれを再生成する戦争小説として機能している。ファーズによれば、この時期南部では、新聞、雑誌、物語や詩、歌などで愛国心をセンシメンタル化したヴァージョンが続々と生み出されていた。(129-130) 『マカーリア』はまさにそのようなものとして読者の感情を動員する結構を備えている。戦争のプロセスは新聞と同じようにジャーナリストイックに語られて、すでに読者が知っている情報と齟齬をきたすことがない。その中で登場人物のドラマが展開することで、物語のエピソードは読者が日々接する悲劇と親縁性を持つようになっていく。また「負傷し、死んでいく兵士たち」に対して「共感を寄せる」ことが大切にされた風潮の中で「兵士個人がヒロイズムのしるし」(Feltz 94) となっていたことに対応して、少年兵の死、老兵の死、アイリーンの父の死、ラッセルの死がそれぞれ当時の戦争詩や歌などのイメージに照応させながら語られている。当時出回っていたさまざまなメディアの戦争言説がここには組み込まれているのである。

戦争が始まると男たちは戦場に向かっていく。そしてまずマナサスの戦いでアイリーンの父親が戦死、翌年一八六二年のマルヴァーン・ヒルの戦いにおいてラッセルが戦死する。これらの戦いの記述は当時の新聞などの戦況報告にほぼ忠実であり、将軍たちも実名で登場している。また新聞によるセンセーショナルな書き方とも、そのイメージは酷似している。たとえばアイリーンの父が被弾した戦場は「惨たらしい光景」を呈している。「死んだ人、死にゆく人、敵も味方も区別なく無差別の破壊のなかに重なり、血の海でのたうちまわる……黒ずんだ首なしの胴体、ちぎれた手足―陰惨な光景と苦悶の声がこの戦いの現場に満ちている」(335)。同じ戦闘を伝える『リッチモンド・デイリー・デイスパッチ』特派員「D」は、戦いを「この目で見た」ものとして語ったあとでその戦場の様子を「大虐殺

(carnage) の現場は筆舌に尽くしがたい」としながら「こちらには死んだ人、死にゆく人が累々と山をなす。あちらには脚をやられてもがき苦しむ馬たちが…」という具合にセンセーショナルに描き出していく(1)。

また、死の場面にはことのほか紙幅が割かれている。アイリーンの父は脇腹に被弾してしまふ。いまわの際にラッセルと和解するが、顔に「死相」を浮かべた彼は自分の死を予感している。水を求め、「どこか草の生えたところ」に移してくれと願い、故郷に埋めてもらいたいと言い、さらには自分が「兵士らしく立派に死んだ」とアイリーンに伝えるように言いおいて息絶える。(336-339) 南北戦争を歌った大衆詩や歌にはこのようなイメージがあふれている。たとえば『南部戦争歌集 (War Songs of the South)』(一八六二)に収録されている「死に行く兵士 (The Dying Soldier)」は戦時中人気のあった雑誌『サザン・フィールド・アンド・ファイアーサイド (Southern Field and Fireside)』に掲載されたものだが、「草地」に寝かされた負傷した少年兵の顔には死相 (the grey shadow of death) が浮かび、死を覚悟して周りの人々に別れを告げる (158) という設定はアイリーンの父の死の場面と非常に似かよっている。アイリーンの知り合いの少年は故郷の母を求め、老人は妻の元へ返りたいと願いつつ息を引き取り、ラッセルは最後にアイリーンの腕の中で息絶え、髪の一房を形見にする。

これら数々の死のシーンは南北戦争当時出回っていた兵士の死の表象の典型的なものである。「累々たる屍」の一部をなしてしまう死に方は、一五世紀以降一九世紀半ばまでに作り上げられてきた「善き死に方」、すなわち家庭という空間において家族と牧師に看取られ救いを確信して最後の言葉も残し、確実に神の恩寵を予感して死ぬこととはあくまでも対極にある。したがって戦場においては近くにいた者たちがいまわの言葉を聞き取り、家族に知らせることが多かった。大切なのはきちんと死を自覚して死ぬことで、その最後のことばがまさしく救済の保証とされていたからである。だから「不意をつかれて」死ぬことが多いなら、そのような死にも覚悟を決めてあるということが、た

とえ「累々たる屍」の中にまざることになろうとも、「すでに覚悟の死」という捉え方を可能にもしていた。したがって死を知らせる報にはかならず救済を確信させる言葉と、可能ならばこの世に残る愛する人への言葉が、たとえば「妻に僕は幸せに死んでいったと伝えてくれ」のように伝言として添えられていた。(Fraust "Art of Dying" 3-26)

大量に死亡するからこそ、そのさまは「累々たる屍」とされる一方で、家庭から離れてもなお善き死を迎えていることを語るためには個人化もされねばならない。ファウストによれば当時兵士を看取った牧師や看護婦が最期の様子を伝える手紙はひとつのジャンルと言えるようなパターンを持っていたが ("Art of Dying" 29)、『マカーリア』においても、少年、老人、アイリーンの父、ラッセル、つまり老いも若きも父も恋人／夫も、あまねく南部の男性を襲ったこの悲劇をそれぞれ典型的なパターンで描き分けることにより、読者自身が味わいつつある現実を共有するのである。少年は母（意識混濁によりアイリーンを母だと取り違えている）に自分が勇敢に戦ったという言葉を残し (382)、老兵は妻に南部兵士として立派に義務を果たしたと伝えてくれと言う (383)。アイリーンの父は「自分は死ぬことがわかっている」(337)と覚悟を語り、自分が「責務を果たしたことを」娘に伝えてくれと言ひ遺す (338)。ラッセルがかつての恨みを捨て去り「キリストを介して、死んだのちの幸せを確かに願っている」と言うのを聞いてアイリーンの父が「なんとありがたいこと」(403)と応ずるのは、ラッセルの死が善き死になることを彼の言葉から確信した安堵の表出である。であるからこそ彼女は「別れの耐え難い辛さ」(403)も取り去られるかのような気持ちになることができるのである。死体に死体が重なるようなかつてない死のありようの禍々しさはまさしくメルヴィルが南北戦争の詩集で書いたことかもしれないが、無名の死者を大量に積み上げていくような現実にあたかも対抗するかのように、これらの死のシーンは彼らの救済を約束し、また遺言としても機能し、読者の肉親たちの戦場の死の代弁もしている。その意味では物語中スポットライトを浴びる個別の人の死は、当時の「死にゆく兵士」モチーフの詩や歌、あるいは

戦死を伝える「お悔やみの手紙」と同じく、死のありかたを「善き死」の想像の枠内にとどめ置く表象の努力でもあった。また、そうした紋切り型ともいえる表象を共有することは、戦争に際して想像／創造される南部の共同体のセンチメントの追認でもあっただろう。

ルービンの言うように、ネイションがいわゆる政治体制としての国家 (state) とはちがって「共通の文化、歴史、社会的な人格を持つ」ということを意識的に信じる人たちが創りだす、感情、イデオロギー、センチメンタルな構築物」(3) であるとすれば、戦中に書かれ、出版されたこの物語は、当時流通した戦争表象、戦争言説をセンチメンタルな女の小説に接続して、まさしく戦争をセンチメンタルに体験する場をなしている。それどころか、そもそも南部小説を読むこと自体が愛国精神の現れでもあった。南部では、連邦離脱した時期から、政治のみならず文化の独立も語られるようになっており、南部の人々は北部から来たものなど読まずに南部作家のものを読むべきであるという風潮があったのである。(Fahs 22-25; Rubin 25-28) 『マカーリア』もまた当時の戦争と政治の言説と干渉しあい、それらの規範的といつてよいような表象をちりばめることによって、そしてまた文中でさまざまに引用される詩もイングランドの詩にすることによって、アングロ＝サクソンの南部文学を上演してみせている。『マカーリア』は戦争の経験を介して集団として南部という共和国の想像／創造をアップデートすることにかかわる、これもまたひとつの南部連盟のナショナルリズムにより生成され、またそれを再々生成するプロセスとして戦争言説の一翼を担っているのである。

### 3 愛国の女と南部のオーロラ・リーたち

戦争が動員するのは男だけではない。ファウストは、戦時の中流以上の女性たちの役割を、『ザン・フィールド・アンド・ファイアーサイド』誌一八六三年四月一日号に掲載された記事（“Educated Woman-IN Peace and War”）から引用して、女が男らしさを支えることを期待されていた事情を紹介している。ここでは「女性たちの存在あってこそ、南部連合の兵士は名誉と勇氣、美德と真実などを備えることになるのです」（Faust “Confederate Woman” 1204）と説かれているのである。しかし女の美德に男らしさを支えさせることは銃後の献身を女の美德のうち呼び込むことになる。事実、大義のために犠牲をはらうこと―制服の縫製、備品の製作、傷病兵の看護から、父、夫、兄弟の命を失うことにいたるまで―こそが愛国心の追認行為となっていた。（Faust “Confederate Women” 1206; Rubin 53-64; Carter 118-149; Rable, *Civil Wars* 136-162）それだけではない。「銃後」は女の領域の改変をも呼びこんだ。プランター階級の女性たちが組織だつてパブリックな場に出て行くことには当初は異論もあったが、戦局が不利になるとそのようなことを言っていられなくなったのだ。女性たちは仕事を通じて「役に立つ（useful）」という感覚を味わうようになるが（Faust “Confederate Women” 1206）、しかしそれは男を戦場に送り出すという犠牲のもとに成り立つものであった。

愛する男たちを差し出す犠牲の精神は美德とされ、独立戦争の再演としての南北戦争においては女性たちもまた独立戦争時のように共和国の母として語られた。（Rubin 53; Fahs 120-149; Rable *Civil Wars* 136-137）当初はその犠牲は他人のために働くということであったのが、次第に南部の「大義（cause）」のためにもっとも愛する者―父、夫、

兄弟、息子―を犠牲にすることが求められるようになった。女たちが男たちを送り出し、戦場の男たちの犠牲に流す涙は、南北問わず出版物に頻々と登場したが、この涙は私的な女性の空間と戦争という公的な空間を結びつける。実際のところ、出征する男たちの制服を作り、彼らを見送る旗をつくり、それをうち振るとき、ネイションを想像することはきわめて具体的なかたちで、個人的に体験されており、そのことは歌や物語においては男を送り出す女、喪失に泣く女等々というかたちで、戦争表象の重要な一部となっていた。(Fats 129-130)

『マカーリア』の戦争物語部分におけるアイリーンとエレクトラは、上に述べたような戦争に貢献する女をめぐる南部の言説を生き抜いている。たとえばルイーザ・メイ・オールコットの『仕事』も南北戦争に女の仕事と自立が戦略的にかめられている物語であり、書かれた時期が重なる『マカーリア』もまた打ち消しがたく同じテーマを共有している。とはいえ、オールコットにおいては黒人と同じく女性も自由と独立という政治的なゴールを共有するものとして描かれるのに対し(Hilgonet 80-81)、『マカーリア』の場合にはむしろ徹頭徹尾女の領域を守り抜くという戦略から逆説的に自立を引き出すところが「南部」的と言える部分だろう。とりわけアイリーンは進んで愛する男(父、ラッセルら)を戦争に差し出す「犠牲を払う」女として南部連合の女を体現する。しかし彼女たちはその犠牲によって、つまり徹底的に銃後の女になりきることによって、逆説的にそれ以前にはなし得なかった「役に立つ (usefulness)」性質を獲得し、「独立」を果たしてしまうのだ。独立戦争のレトリックで語られる南北戦争は彼女たちをそれまで縛っていたジェンダー規範からの自立を呼びこむ契機になっているのである。

戦争が始まるとアイリーンはラッセルからの愛の告白をまたもや退け、彼を戦場へと送り出す。アイリーンはラッセルに対し「神と真実と国にのみ奉仕する、より神聖で、無私で、利己心なき望み」(327)こそがなにより慰めになるのであるとラッセルを拒む理由を述べ、アテネを護るべく「みずから進んで神への犠牲の祭壇」にその身を捧げた

古代ギリシアの女、マカーリアの逸話を引き合いに出して、自分にできることは父と恋人を愛する国のために捧げることであるという決意を語る。この時ギリシアから独立戦争を経て南北戦争へと至る共和国の女、つまり国のために犠牲を払う女という系譜を作ることによって、その犠牲は正統なものとしても語られている。しかも「ああ、ラッセル！ わたしは勇敢にも、強くも、忍耐強くもなれます。もう二度とこの世であなたの顔を見ることができないことにも耐えられます。あなたをこの国のために明け渡すこともできません」(328)というこの犠牲の精神は、ラッセルが高貴な死を迎えたのちには二人天国でまた会えるという確信から示されるように、キリスト教の教えに転化されている。同じ発想はラッセルを看取るシーンにも繰り返されている。(402-403) 南部のために犠牲を払うことは殉教者となることと同義の崇高な犠牲なのである。ここでは宗教を介したネイションとの結びつきによって女を定位しなおすことが、ネイションを殺傷を正当化する暴力装置へと変容させる過程に女が加担する契機となっているが、その暴力性はセンチメンタルに隠蔽されて、キリスト教に支えられた犠牲を通じてアイリーンはラッセルともども殉教者の輝きをいやがうえにも帯びることになる。

女の仕事の領域は、『マカーリア』にも描かれている。(エレクトラが従事した)スパイ活動や、独立戦争時の女性の英雄のエピソードなどの少数の特殊事例を除けば、その仕事はいわゆる銃後の活動だったため、基本的には制服の縫製や、傷病兵の看護等々の仕事だった。ただし従来の女の仕事と異なっていたのは、これらが家庭から公共空間に拡がりを見せ、しかも従来教会による慈善という枠を超えて組織的に行なわれていたという点である。アイリーンの行なう仕事とそれを正当化する理由も同じものである。父が不在の今、プランテーションを「あっぱれなほど体系的に正確に」(325)経営してのけ、兵隊の後方支援についても「監督」役(371)をこなしている。そして孤児を大量に産む戦争によって孤児院「経営」の夢までも実現してしまう。「男のような知性」を花開かせたアイリーンは、

「経営」という一般には男のものとされていた仕事に邁進しているのである。しかし、そこには仕事で家の外に出ること、男の仕事をすることを正当化する理由があった。彼女の仕事は管理職とはいえ、裁縫、育児、看護などの女の仕事だからだ。彼女はつねに母の代わり、妻の代わり、娘の代わり、妹の代わりに戦場の男たちを支えている。看護の場では意識がもうろうとした少年から母親と間違われても、そのままに母を演じきる。エレクトラが「現代のマカリア」として絵にしようとしているのはそんなアイリートの姿である。

しかし女の仕事を押し進めることはラディカルな意味をもはらみうる。家族の比喩を家庭の外に押し広げることは、たしかに女が家庭以外のところで何かの仕事に携わる際の重要な理由づけではあるが、その延長線上で、あたかも現実のほうが疑似家族のような反転した様相を帯びてくるからである。そもそもアイリートとエレクトラには母がなく、オーブリー夫人がその代わりだった。ニューヨーク時代にも友人の母や兄、あるいは画家の母といった人々が彼女たちの肉親の代わりにさまざまな愛情や導きを与えていたが、今やアイリートがその役割をパブリックな場所で果たしているのであり、血のつながる親子でなくても、本当に結婚しなくても、娘の代わりや妻の代わりが務まるかのである。この理屈を突き詰めるならば、それが「役割」である限りは結婚して子供を産むという意味で妻や母である必要は何もないということになる。そのラディカルなヴィジョンこそが最終章でのアイリートの疑似家族イメージに、そしてまたアイリートが独自の利点を述べる部分に見えてはいないだろうか。アイリートはエレクトラと暮らしている。が、さらに彼女の父親の代わりのように愛情を注いでくれたアーノルド医師は戦後アイリートたちと家庭を営むと言っており、そこにアイリートの叔父エリックも加わる予定である。ハーヴェイもW町に来るとのこと、独り者の人々がそこで疑似家族を営む将来像が描かれるのである。そしてそれができるのはアイリートが独身だからである。結婚してしまえばその家族だけの妻や母になってしまうが、独身であればこそ役割を「すべての、苦しむ仲間たち」

(413) に振り向けることができるという意味で「最も役に立つ」(412) のだから。

自身の有用性という発想はエヴァンズの人生と重なる部分も多いかもしれない。一八三五年生まれのエヴァンズ自身、裕福な家庭に生まれながらも幼いときに父が破産したせいで、一八五九年の『ビュエラ』のヒットまでは一家の財政は安定していなかった。結局結婚したのは一八六八年であり、『マカーリア』執筆時には三〇代を目前に控えた、いわゆるオールドミスであった。ニューヨークのジャーナリストとの婚約を破棄するほど南部ナシオナリズムに傾倒する (Bayn 281) 彼女もまた女の領域の狭さにいらだっていた。知己でもあるボーリガード将軍にあてて書いた手紙では自分が「力弱き女のペン」でできる貢献をせめてしようとしつつも「女が感化力を及ぼせる領域」の狭さに、そして「野営地」から排除されていることにいらだちを示している。(Sexton 42: Faust "Introduction", xvii) ファウストの指摘するとおり、戦時中に執筆された『マカーリア』は、有用な存在になることを願う女たちに対して女がいかに戦争に貢献して自己実現できるかというモデルを示したものであり、同時にエヴァンズ自身の大義への貢献でもあった。(Faust "Introduction", xvii)

男とのロマンスと結婚から女を規定しないこと、いわゆる家庭小説ジャンルの領域から出ることは、かくもラディカルなヴィジョンを生む。最終章はまだ砲弾鳴り響く時代であるにもかかわらず、不思議な静謐さが漂っている。戦争の物語を経てあらたな女の領域を開いて、ロマンスと結婚という家庭小説のくびきを外した共同体イメージを提示してしまつたからには、この最終章はもはやいわゆる家庭小説とは呼べない地平に来てしまつたことだろう。男という南部におけるジェンダー規範の参照点はなくなり、家庭にしばられるわけでもない彼女たち。自分たちを縛るものがなくなつた今、一人前の芸術家となつて北部の封鎖を破つて戻ってきたエレクトラを自分の家に招き入れたアイリーンは、フィラデルフィアのピーター夫人にならつて女性のためのデザイン学校を設立し、そこにエレクトラを校長

として据えようと計画している。そこではもはやアイリーンとエレクトラーフェアな女とダークな女、あるいは男のような知性の女と感性の女のどちらかが幸せに、どちらかが不幸になるということはなく、むしろお互いを補完し合うようにたたずんでいる。男と女のカップルではなく、互いを補完し合う女と女が完全な一対として生き残っているのだ。しかもいまやエレクトラーが描くのはラッセルではなくアイリーンの肖像画である。二人はそれぞれ天国でラッセルと再会できることを夢見つつも、現実の夢に邁進している。

徹頭徹尾女の領域にとどまり続けたエヴァンズがはからずも、そして逆説的にもたどり着いた地点は「結婚」というゴールではなく、シスターフッドに支えられたカップルと疑似家族のごときコミュニティの姿である。ファウストは、エヴァンズが決してフェミニストではなかったにもかかわらず、この大ヒット作については、アイリーンが結婚しないこと、野戦病院という空間に向いていくこと、あるいは独身を賛美することなどをめぐって批判が出たことを紹介している。(Faust Mothers 175-177) 当時プランター階級では現実に男たちが戦場に行くせいで独身の女が増加しており、彼女たちが野戦病院に向くことも必要悪の現実として認知されていた。だからこの批判は、ひとつには現状についての暗黙の了解があるからといって、それに言葉で承認を与えることには抵抗があるということがひとつあるだろうが、女の領域が家庭の外に出ることが含意するラディカルな規範侵犯の可能性も原因だったかもしれない。

たしかに一見して、エヴァンズはフェミニストではないと言えるだろう。実際一八六七年に出された『セント・エドモント』においては、もう一度家庭小説の枠に戻り、「結婚」で終わらせ、その際にヒロインのエドナはみずから進んで小説家としてのキャリアを手放している。しかし役に立ちたいと激しく望んでいたのはエヴァンズ自身もそうではなかったか。だとすれば「きみの文学のくびきを今日、僕は断つ。もう本は書かせない……君は僕だけのもの」

(58) というセント・エルモの台詞をエヴァンズ自身どのような思いで綴ったのだろうか。その翌年に結婚したエヴァンズは夫が執筆を喜ばなかったこともあり、徐々に寡作な作家になっていく。

けれども、前後の作品のヒロインが結婚を選んで作家の道を捨てるからといって、『マカリア』だけが戦時中の特異な女性たちの状況を描いたものであるとは決して言えないだろう。というのも、アイリーンは物語の最初から人の役に立ちたいと願っているが、意に染まぬ結婚など、試練に遭うたび、女が作家になる夢を実現する『オーロラ・リー』の一節が差し挟まれるからだ。アイリーンがニューヨークで目的を見失いかけるとき、あるいはひとり夜中に天文学を極めようとしているとき、ヒューとの結婚をめぐつて父と対決せねばならないとき、あるいはアーノルド医師と慈善活動をめぐって意見が対立するとき。そして最後の章でも、独身の辛さをエレクトラが嘆き、アイリーンが自身の利点を説くとき、つまりみずから設定した夢を貫こうとするときや、それが挫けそうになるときに物語のなかに一貫して響くのが一人称で語られるオーロラ・リーの詩とりわけ作家修業を重ね、女にも仕事はできると主張するオーロラ・リーの声なのである。そして物語の中の戦争と同じく、二人がロールモデルにする女性芸術家や女性科学者、あるいはフィラデルフィアに女性のためのデザイン学校を作ったピーター夫人 (Chalmers 237-252) などとはつねに実名で出されており、絵空事などではない明瞭な指示対象を小説の外の現実の世界に持っている。その意味では彼女たちの夢は決してたんなる夢でも絵空事でもない現実的な意味を持つものとして小説に書き込まれているのである。

アイリーンとエレクトラは言ってみれば南部のオーロラ・リーである。けれども、仕事と恋愛の両立を成就させるオーロラと違って彼女たちが役に立ち、また画家として独り立ちする条件は、男たちの死によってロマンスの結構が失われることである。最終的に愛する人をネイションに差し出すというその一点において逆説的に女の領域は拡大し、

彼女たちは愛国のロジックに依拠する限りにおいてはオーロラ・リー以上に徹底した独立を果たすことになる。最終章を可能にして南部版オーロラ・リーを描くには、男性を参照点として規定される女ではなくいったんネイションと結びついた「南部連合の女」なるものを想像し、定置しなおすことが―父の娘から南部の娘になることが―必要だったのだ。しかしそれは裏を返せば、南部においては、戦争というラディカルに平時と乖離した状況のもとで男を喪失することでは自己実現は成り立ち得ないということでもあり、「恋も仕事も」両立するオーロラ・リーとはそこが決定的に異なる点だということである。

## 結

アン・グッドウィン・ジョーンズは『ビューラ』を論じた際に、ビューラが激しく自立を求める教養小説の部分（ビルドゥングスroman）とエヴァンズが南部の女として家父長制や宗教を自分をかたちづくるものとしてとらえていた部分が葛藤していたと指摘する。エヴァンズ自身が引き受けていた南部の愛国の女という役割はむしろ後者の側につく仮面であり、そのために教養小説の部分をもろ南部のジェンダー規範の鋳型にはまるように成型したと解釈しているのである。ジョーンズによればエヴァンズは幼いころからそうした仮面をかぶって、真意をけむに巻くところがあり、それにはしばしば「犠牲」というレトリックが使われていたという。たとえば赤い靴を盗んだ幼いころの行為に対して、弟のためと言うことをはじめとして、つねに「誰かのために」という言い方で立場を正当化してきたというのである。(70-91) そうであるとするれば『マカーリア』というタイトルそれ自体、この作品が壮大な犠牲の仮面であることを示唆してはいないだろうか。この作品は副題を「犠牲の祭壇」と銘打って南部連合に捧げられているプロパガンダ小説である。

作者本人もその意図を持っているであろう。しかし、それにすぐわない最後の章、そして『オーロラ・リー』の執拗な引用、あるいは実在の女性たちをロールモデルとして引き合いに出すことなどからすれば、国家の「ために」という大義は作者本人も意図せぬ仮面であったかもしれない。オーロラ・リーの声を響かせつつ南部のオーロラ・リーたちを描くこと。戦争とネイションに結びつけて、女の有用性を歌いあげること。はからずもそれが戦争小説というかたちをもつても言い訳にはならず批判を呼び込んだのは事実にしても、『マカーリア』は、しかしながら南部ナシヨナリズム小説としてベストセラーになった。批判を浴びようとも、現実には女たちは戦争のためにバブリックな場に出て働いており、エヴァンズの作品はそれに承認を与える。アイリーンたちが「生得の権利」という言葉を使っていたことを思い出すなら、彼女たちがオーロラ・リーになる戦いもまた革命だったのだ。

ニーナ・ベイムが一九世紀女性作家の小説をとりあげた『女の小説』で、エヴァンズを最後の章に据え、「エヴァンズと女性小説の衰退」とタイトルをつけたものなるほどと頷ける。いったん家庭小説の臨界点を踏み越えてしまつたからにはそれを維持することは困難だろう。事実、フォーミュラ家庭小説は少女の世界に場を移すことをベイムは指摘してもいる。(296) また皮肉にもそのような枠組みをみずから生きたエヴァンズ自身がその後寡黙になり、このあとの作品にはジュエラやアイリーンなどの一途なヒロインはもう登場しない。女性の領域を守るといふ「女らしさ」の仮面をつけて、結婚後はこの分野の作家としてはほぼ沈黙していくことになるという意味では、誰よりエヴァンズ本人の作家生活こそ、オーロラ・リーになりそこねた「未完の革命」であったのかもしれない。

(1) 一橋大学言語社会研究科博士課程の榎本千賀子さんは、作品と照応するようないくつかの新聞記事の情報を提供してくれた。ここにお礼申し上げる次第である。

(2) たとえば、アーノルド医師と慈善活動をめぐって話している場面 (Evans, *Macaria* 269)。アーノルドはアイリーンが慈善を組織化していることに反対意見を言うが、それに対し、アイリーンはオーロラが「自分たちにも語ることはできる。それはここにいるロムニーだってわかっていることだ。彼が信じていないのは、まだ成し遂げていないことをきちんと品を失わずにできるか、ということ。だったらやるしかない」(Browning 269) と語るところを引用している。あるいは同じくアーノルドに対して、以前は自分の「感化力の領域には限り」があることを嘆いていたが (Evans, *Macaria* 317)、今は違うと言いつつ引用するのは丁度オーロラがロンドンでひとり「この世で働く許しを得ましょう。それが自分に手に入るいちばんのものだから」(Aurora Leigh, 72) と作家修業をする場面である。アイリーンの働く意志と女にもできるという信念はオーロラを援用しながら語られることになる。また最後の場面 (413) では、アイリーンは「あなた (エレクトラ) がよく引用するあの闊達で才能溢れた女性」(413) の言葉として明瞭に典拠を指し示して、オーロラがこのまま年を取っていくことを恐れながらも、また飢えを恐れながらもお腹が空いているほうが「荒涼としたましい」(Browning 151) よりもましであると不安を払拭しようとする場面を引用して独身であることを恐れない態度を示している。このようにアイリーンは仕事と独身であることについて、オーロラ・リーを引き合いに出して自らの意見を補強している。

## 参考文献

Baym, Nynra. *Woman's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America 1820-1870*. Chicago: University of Chicago Press, 1978.

- "The Battle of Manassas," *Richmond Daily Dispatch*, July 29, 1861. at <http://imls.richmond.edu/80/d/ddr/>
- Browning, Elizabeth Barrett. *Aurora Leigh And Other Poems*. New York: Penguin Books, 1995.
- Carter, Christine Jacobson. *Southern Single Blessedness: Unmarried Women in the Urban South, 1800-1865*. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2006.
- Chalmers, F. Graeme, "The Early History of the Philadelphia School of Design for Women." *Journal of Design History*. 9: 4 (1996) : 237-253.
- Cutter, Barbara. *Domestic Devils, Battlefield Angels: The Radicalism of American Womanhood, 1830-1865*. DeKalb: Northern Illinois University Press, 2003.
- Evans, Augusta, Jane. *Boulay*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992.
- . *Macaria: or, Altars of Sacrifice*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992.
- . *St. Elmo*. Tuscaloosa: University of Alabama Press, 1992.
- Fahs, Alice. *The Imagined Civil War: Popular Literature of the North and South 1861-1865*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2001.
- Faust Drew Gilpin. *The Creation of Confederate Nationalism: Ideology and Identity in the Civil War South*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1988.
- . "Introduction: *Macaria*, a War Story for Confederate Women." Drew Faust Gilpin ed. Augusta Evans. *Macaria; or, Altars of Sacrifice*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992.
- . *Mothers of Invention: Women of the Slaveholding South in the American Civil War*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1996.
- . "Altars of Sacrifice: Confederate Women and the Narratives of War." *The Journal of American History*. 76: 4 (1996): 1200-1228.

- . “The Civil War Soldier and the Art of Dying.” *The Journal of Southern History*. LXVII: 1 (2001): 3-38.
- Higonnet, Margaret R. “Civil Wars and Sexual Territories.” Helen M. Cooper ed. *Arms and the Woman: War, Gender, and Literary Representation*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1989.
- Jones, Anne Goodwyn. *Tomorrow Is Another Day: The Woman Writer in the South 1859-1936*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1981.
- Moss, Elizabeth. *Domestic Novelists in the Old South: Defenders of Southern Culture*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1992.
- Rable, George. *Civil Wars: Women and the Crisis of Southern Nationalism*. Urbana: University of Illinois Press, 1989.
- . *The Confederate Republic: A Revolution against Politics*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1994.
- Rubin, Anne Sarah. *A Shattered Nation: The Rise and Fall of the Confederacy, 1861-1868*. Chapel Hill: University of North Carolina Press, 2005.
- Sexton, Rebecca Grant. Ed. *A Southern Woman of Letters: The Correspondence of Augusta Jane Evans Wilson*. Columbia: University of South Carolina Press, 2002.
- Shepperson, William G. ed. *War Songs of the South*. Richmond: West & Johnson, 1862.
- Stowe, Steven M. *Intimacy and Power in the Old South: Ritual in the Lives of the Planters*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1987.
- Thomas, Emory M. *The Confederacy as a Revolutionary Experience*. 2nd ed. Columbia: University of South Carolina Press, 1991.
- Whites, Lee Ann. *The Civil War as a Crisis in Gender: Augusta, Georgia, 1860-1890*. Athens: University of Georgia Press, 1995.